

## 太陽病ノ脈証 並びニ治ヲ弁ズ 上

太陽病とは、風寒の邪が足太陽経に侵入した段階です。足太陽膀胱経脈は頭部に起り、項部から背部を下って腰に至り、膀胱に属しています。膀胱は津液を貯蔵していて、その津液は膀胱と表裏の關係にある少陰腎の働きによって気化され、太陽の気になります。太陽の気は、体表を運行して皮膚を温め、汗腺の開閉を調節する衛気というエネルギーになって体の表面をめぐるります。換言すると、太陽経が体表全部を支配しています。

風寒の邪が人体を侵襲するとき、まず体表部で邪と衛気（太陽の気）との衝突（邪正闘争）が生じるわけである。表証の第一の特徴です。外邪が体表から侵入しようとし、これに対し衛気（太陽の気）が抵抗を開始すると、体内の気血は体表部に向かうので、脈はこれに応じて内から外に発散するような浮脈を呈するのです。逆に言うと、浮脈がみられたら病はまず体表にあると、漢方では判断します。

頭項強痛というのは、頭が痛み項部がこってこわばるといことです。足太陽膀胱経脈は、後頭部から項を下って背に沿っています。太陽経が邪を受けると、経脈内の気血の流通が妨げられて渋滞するので、このような症状が出現するのです。

悪寒は外感病の初期、つまり表証には必ず出現する重要な症状です。先述したように、太陽の気は体表を運行して皮膚を温める役割を担っているので、太陽経脈に邪が侵入し衛気の正常な働きが阻害されると、皮膚が温められず悪寒が生じます。

浮脈、頭項強痛、および悪寒の三症状が揃えば、直ちに病人は太陽病と診断されます。

で、この時期を太陽病と呼んでいます。

厳密にいうと、太陽病には、邪正闘争が太陽経の経脈上で行われている太陽経病と、病気の舞台が太陽経の腑である膀胱にある太陽腑病とに分けられますが、一般に太陽病というときは風寒の邪による外感病の初期段階の太陽経病を指しています。太陽経脈は体表部を走行しているので、太陽経病は当然表証を呈します。これに対し、太陽腑病は裏証ということになります。

太陽病の上篇は、太陽病の総論的な説明、太陽表証の分類と各々の脈証の特徴を述べ、さらに代表的な太陽表証の一つである太陽中風証とその基本処方である桂枝湯、およびその加減方、変証や禁忌などについて詳しく論じています。

### 条文一

太陽ノ病タル、脈浮、頭項強痛シテ悪寒ス。

まず最初の条文は、太陽（経）病の特徴的症狀について述べています。

浮脈というのは、脈を取ると皮下の浅いところで触

### 条文二

太陽病、発熱シ、汗出デ、悪風シ、脈緩ノ者ハ名ツケテ中風ト為ス。

### 条文三

太陽病、或イハ已ニ発熱シ、或イハ未ダ発熱セザルモ、必ズ悪寒シ、体痛ミ、嘔逆シ、脈陰陽俱ニ緊ノ者ハ名ツケテ傷寒ト為ス。

太陽経病（表証）はその症状の軽重によって太陽中風と太陽傷寒に大別されます。

脈浮・頭項強痛・悪寒という太陽病の症状を備えていて、さらに発熱・発汗・悪風・脈が緩などの症候を呈するものを、太陽中風といえます。中風とは風邪を感受して発生した病症という意味で、一般にいわれる脳卒中などの「中風」とは異なるものです。

風邪は陽邪で体表の比較的浅い部位で衛気と相争います。衛気は陽気に属しますから、陽と陽の衝突で発熱が生じます。

皮膚には血管や汗腺があって、発汗を行っています。この発汗を主る部分を、漢方では営あるいは営陰とい